

第3章

大空間を魅力的なものにするために

大空間の活かし方

巨大建築の内部で作り出すことの出来る大空間の効果を高める建築的手法。

3.1 大空間を見渡せる場所の設計



図 ハンス・シャロウンのスケッチ
「抵抗」

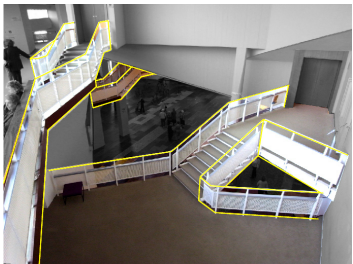


図 フィルハーモニー内部写真
立体的な空間構成



図 フィルハーモニー 外観

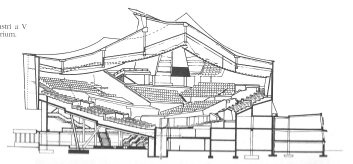


図 フィルハーモニー断面図

斜面／階段／空中廊下／吹き抜け等

「大空間を客観的に見ることの出来る場所の設計」。他者が見える（1.2で取り上げた要素の対比のうち、要素＝人間）というように言い換えが可能である。

<ベルリン・フィルハーモニー 1963 >

<ベルリン州立図書館 1978 > ドイツ

ここではハンス・シャロウンの建築を二つ挙げる。ベルリンのフィルハーモニーと、その向かいに建つベルリン国立図書館である。しかし、この二つの建築の素晴らしさもさることながら、彼の描いたスケッチの中には、「巨大さ」が如実に現れている。スケッチの多くは建物を外から眺めたものであるが、建物の内部外部共に人々が多数描き込まれ、その大きさから描かれた建物がいかに巨大であるかが見て取れる。

写真はスケッチ「抵抗」(1939-45)

巨大空間の囲み。最も根本的ともいえる巨大空間のイメージ。

<フィルハーモニー>

建物の真ん中にシアターを浮かせた設計。外部はベルリン国立図書館に共通し、凹凸のついた黄色い金属で覆われた工業的な印象の外観であるが、内部は白い光の差し込む透明性の高い空間である。

通常シアター本体（劇場部分）以外は味気ない内部となることが多いのに対して、待合室や階段などの部分も立体的に解いている。吹き抜けや、シアターの傾斜をそのまま活かした天井高の変化をたくみに演出する「シークエンス」の効果が複雑に用いられている。通常のシアター（スタジアム）に起こる「シアター（スタジアム）部分とその他の部屋の極端なギャップ（東京ドームのような「シークエンス」）ではなく、建築全体で様々に楽しめる設計となっている特異な例。

空中廊下のように天井からつり下げられた階段からは、大きく一室空間となったホワイトエが見渡せるだけでなく、それらが立体交差することでまた、空間に起伏が生まれている。

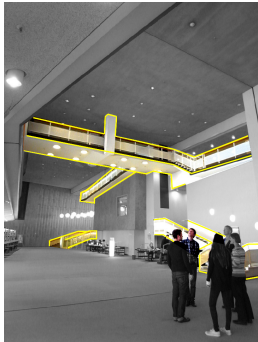
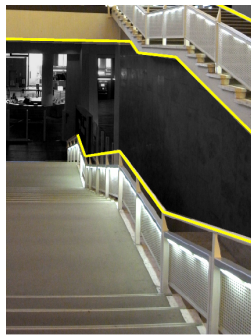


図 ベルリン州立図書館

<ベルリン州立図書館>

フィルハーモニーと同様、閉じた外観である。入り口を入ると通常よりも高い天井高の空間が広がり、入り口との間に大きなギャップが生まれている。内部は大きな一室空間に多様な場所以が設計されている印象で、歩くごとに印象を変える。フィルハーモニー同様シャロウンの設計において共通して見られるのは、階段や空中廊下、またライトや家具など、様々なものの配置によって、全ての場所のイメージをがらりと変えることである。また、広い閲覧室を空中廊下などから見渡せる設計がなされている。

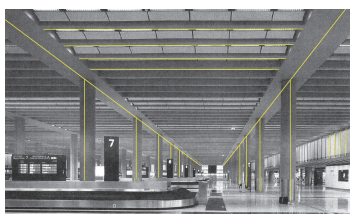


図 香港国際空港ターミナル

<香港国際空港ターミナル 1998 > 香港

ノーマン・フォスター設計。アジア地域とオーストラリアにまたがるグローバルなハブとしての場所に位置する香港空港は世界でも最大級の空港である。香港唯一のエアターミナルとして1998年に完成し、2040年までには、ニューヨークのJFK空港とロンドンのヒースロー空港の利用客を合計した数に相当する、年間8000万人の乗客を処理出来るようになる。

自然光のあふれた、もののない雑然とした空間は、都市へ通じる劇的なゲートウェイを作り出しているのだが、空間の明瞭さと等しく重要なのは、自然に位置が解るような場所を利用者に強調するという設計意図もある。

実際に訪れると、空中廊下の存在によって、空間の巨大さ（奥行き）を、見渡せる場所が設計されており、それを強調するように柱やサッシなどの要素が全て規則正しく反復されている。



図 ドイツ国会議事堂

<ドイツ国会議事堂 1999> ドイツ

ノーマンフォスター改修。

「開かれた議会政治」というコンセプトを具現化した、ガラスドームを議事堂上部につくる。このドーム（屋上）からはベルリン市街が望め、眼下に議場がのぞけるような設計がされている。ドームには一般の見学者の歩ける通路が巡らされ、ドーム内を空中散歩しているかのような体験が味わえる。



<ニューヨーク近代美術館 2004> アメリカ

谷口吉生設計。

内部の空間を壁や床で完全に遮ることなく、大きな空間を保持したままの設計。吹き抜けや開口、空中廊下等で様々に歩き回ること、美術館全体を立体的に空間体験することが出来る。



図 ニューヨーク近代美術館

3.2 建物自身（外壁）が見える設計

巨大であることを内部から実感する→内部からその建築自身（外壁など）が見える建築設計手法。周囲の建築とその建築自身との対比が可能になる。

<ケルン大聖堂 1880 完成> ドイツ

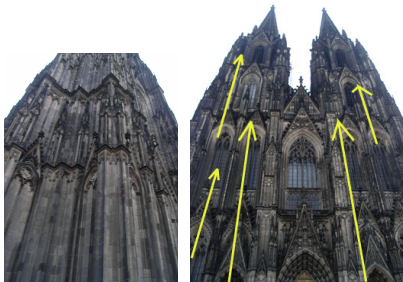


図 ケルン大聖堂
左 双棟 細部
右 正面

1248年に建設が始まるが、全てが完成したのは建設開始から600年以上が経過した1880年である。高さ157mの大聖堂はアメリカのワシントン記念塔（高さ169m）が完成する1884年まで建築物としては世界一の高さを誇った。

双塔の教会は搭乗に上ると、もう一方の塔が視界に入る。自分のいる場所と同じものが見えるこの効果は、自分の立っている場所の高さをより強く認識させる効果を持つ。

また、外観ではこの塔の先端が先細りで鋭く鉛直方向を強調しているだけでなく、壁面には鉛直方向にたくさんの直線（凹凸による意匠）が施され、更に垂直性を高めている。

<ペトロナス・ツインタワー 1998> マレーシア



図 ペトロナス・ツインタワー写真

シーザー・ペリ設計。

高さ452m。竣工当時は世界一の高さを誇る。依然として双塔の建築としては世界一。イスラム様式でマレーシアのモスクに似たデザイン。

<フジテレビ本社 1996>

丹下健三建築設計事務所設計。

空中廊下と球の組み合わせ。建物内部から、様々な箇所から外部を見ることが出来る。

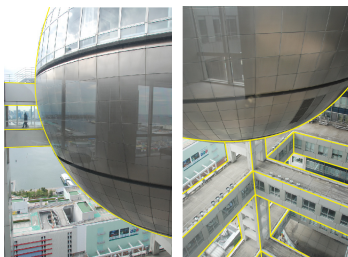


図 フジテレビ内部からの写真



図 フランス国立図書館

<フランス国立図書館 1996> フランス

ドミニク・ペロー設計。

手狭になったフランス国立図書館を新築して世界最大の規模に拡大するというミッテラン前大統領の計画による。長方形の敷地に、「本を開いて立てたような」L字型の、高さ100mのガラス張り超高層ビルが4棟向かい合って建てられている。

「四冊の本」に囲まれて作られた中庭に向かってガラスのファサードが続き、図書館内部からもL字型のボリュームを見ることが出来る。

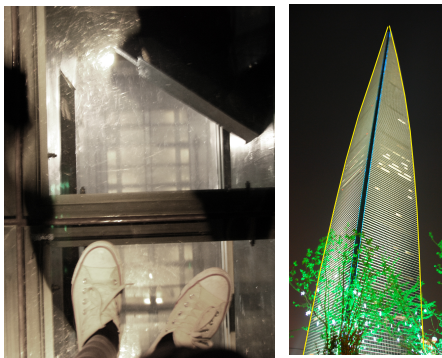


図 上海環球金融中心
左 最上展望室から 右 下からの眺め
下 断面図 二面

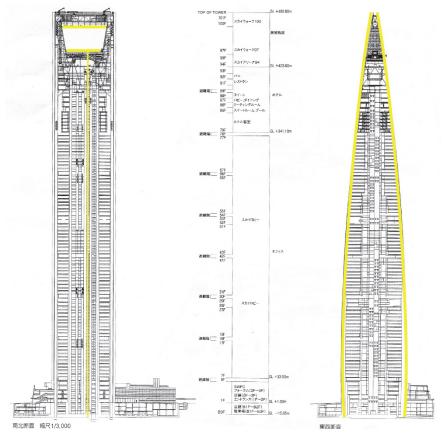
<上海環球金融中心 2008> 中国

高さ492m。2011年一月現在世界3位の高さを誇る。

栓抜き型のビルの上端、巨大な穴は風によるビルへの加重を軽減するためのものである。この穴はビルの97階から99階に相当し、この穴の上階と下階に位置する94階、97階、100階は共に展望台となっている。97階展望台の天井と100階展望台の床はガラス張りとなって、建物の高さが実感出来る設計となっている。全体と比較すれば相対的に短く見える穴の上下の距離も、実際は50m近くあり、ガラス張りの上下階ではそれが身を以て体験出来る。

また、長いエレベーターは上述した洞窟の役割を果たす。ここまでの高層建築になると、エレベーターを降りた先は雲の上であることもしばしばあり、まさに異空間である。

このビルの外観は、正面（断面図左）からは先細りのデザインではないが、横方向（断面図右）からは究極的に先細りの形態をしており、どこまでも空に伸びていくかのような錯覚を覚える。



<シャルル・ド・ゴール空港 1974> フランス

ポール・アンドリュウ設計。

第一ターミナルに設計された、立体的にエスカレーターの交差したアトリウムにより、空港という様々な人々の行き交う建物の中で、人々の移動を可視化したようなデザインが印象的である。このターミナルからは長いトンネルのような「歩く歩道」が設けられ、シークエンスによる空間のギャップも演出されている。



図 シャルル・ド・ゴール空港
上 アトリウム 下 歩く歩道